同じステージで広がる世界

松江市立東出雲中学校　三年　　藤原杏夏

私は小学校の頃からダンスを習っています。ダンスは、私にとって、私の感情を表現する場です。私が習っている、学んでいるダンスは、ヒップホップなどストリートダンスと呼ばれるものです。今はさらに「コンテンポラリー」といわれる、自由に表現することやしなやかな動きが求められるものをしています。それは人が自分の感情を体のすみずみまでのせて表現します。心の表現と言った方が良いかもしれません。身体で心を表現することは、自分を開放的にすることなので、視野が 360 度広がるのです。全神経を集中して、私は踊っています。

地元の島根県だけでなく、大阪などで公演することもありました。私は、ダンスを通じて、毎日、私が生活しているエリアよりも大きな世界で多くの人と出会うことができました。その中で一番大きかったものは、障がい者の方との出会いでした。

初めは小学６年生の時、視覚障がい者の方と一緒に踊るダンス公演に出演したときでした。それは、皆がそれぞれの感情を自由に表現し、一つのストーリーを創りだすものです。

私は今でこそ、日々の学校生活や日常の生活では、あまり関わることのない障がいのある方を仲間として身近に感じることができていると思います。しかし、当時の私は今の私とは違っていました。

慣れない事ばかりの舞台を控え、日々の練習でも緊張していました。ある練習の合間、一緒に出演する視覚障がいの方を楽屋まで誘導してほしいと、振付家の先生から頼まれました。「はい」とは言ったのですが、私は、どうしたら良いのか全く分からなかったのです。私の他にも誘導していた人がいたので、見よう見まねで、私の相手の人の手を取りました。

「もう少しで階段があります。」「右に曲がります。」誘導中、心臓が激しく脈打っていたのを覚えています。もう少し…と言ってもどれくらいか分からないし、曲がるタイミングにしても、ベストな瞬間なんて分からないと思っていました。でも、その時の私にはそれが精一杯でした。無事、楽屋についた時は、心の底からほっとしていました。私が心臓の音がまだうるさいことや安堵で体が解れることに気を取られていると、手をとっていた人が「ありがとう」と声をかけてくれました。そのことは、小学生だった私の心に嬉しさと自信を与えてくれました。

それから一年後。振付家の先生のつながりで、文化庁や国際障害者センターなどが主催のダンス公演「ブレークスルー・ジャーニー」のオーディションを受けました。子どもや大人、障がいのある人など、たくさんの人が参加していました。そして、その大勢の中から私は選ばれました。選ばれなかった人達の思いを背負って、務めようと思いました。

この公演は大阪で行われ、障がいの有無や国籍、性別、プロアマを超えた大規模なダンス公演です。またこれも一つの物語を、一つの舞台上で、全員でつくります。車いすの人、視覚に障がいのある人、聴覚に障がいのある人。それぞれの感情をそれぞれの体に乗せて表現

します。

その公演で、初めて聴覚障がいのある方や手足に障がいのある方などと同じステージに立ちました。リハーサル前、私と同じ島根から出演する仲間たちと主役の方にあいさつに行くことになりました。その方は、耳の不自由な方です。そのためあいさつは、言葉ではなく手話での会話となります。ですが、私や仲間たちは手話は全くできませんでした。そこで私たちは、インターネットで調べ入念に練習し、仲間とあいさつへ向かいました。その時の緊張は、初めて視覚障がい者の方の手を取った時と同じようでした。下手な手話だったと思いますが、相手の方にちゃんと伝わったようでした。この時もまたホッとしたとともに、相手の方の嬉しそうな表情が伝わり、私もとても嬉しく幸せな気持ちになりました。

文化や音楽、そして私の大切なダンスや表現は、多くの人を繋ぐことができます。なぜなら心そのものを映し出すからです。でも、そんなステージに立ちながら自覚したことがあります。私は、無意識の内に人と人との境界をつくっていたのかもしれないことです。障がい者の方々は私とは違う、無関係な人達だと思っていたかもしれません。でも今では、その認識を改め、自信をもって障がい者の方と接することができていると思います。

私がこんな簡単なことに、でもとても大切なことに気づけたのは、同じ時を共有し行動することで、一歩踏み出せたからでした。あの時「ありがとう」と言ってくださったけど私こそ言いたいです。これから、日常の中でも、表現という私の大好きな場所でも、視覚障がいの方と手をつないだように、聴覚障がいの方に思いを伝えたように、多くの人と出会い、繋がっていきたいと思います。